

---

# 道具屋うまー

雛祭パペ彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道具屋つまー

### 【Nコード】

N1871B

### 【作者名】

雛祭パペ彦

### 【あらすじ】

ある決意を胸に、道具屋経営を辞めて、新たな人生を送ろうとするオッサンの話。ブラックユーモア。

いつものように店の営業を終えたあと、道具屋のオヤジは、テレビを眺めながら、ビールを飲んでいた。

「うーうーみゅ……」

オヤジの表情は、けわしかった。

ひどく顔をしかめているところから察するに、飲んでいるビールが苦いのだろうか。

「バカな！　いまさらビールが苦いくらいで、顔をしかめたりするものか！」

ひとりごと、だった。

道具屋のオヤジは、先程から、誰を話し相手にするわけでもなく、考えている内容をわざわざ声に出して、独り言を繰り返していた。

「そう……いまは亡き先代社長の意志を継ぎ、この小さな道具屋を切り盛りするようになって、はや15年。オレは、死にももの狂いで働いてきたつもりだ」

となりの台所では、道具屋の妻が夕飯の準備を進めている。夫が、酔った勢いで三文芝居のようなセリフを喋りはじめるのは、いつもの事なので、まったく相手にしていなかった。

「オレの仕事……薬草と毒消し草だけを、ひたすら冒険者たちに売るといふ退屈な日々。あ、いかんいかん。退屈などと思っではいけない。たとえ、それが退屈な行為であったとしても、一流の道具屋たるもの、薬草と毒消し草を売る行為を、つまらないと思っではいけないのだ！」

大声で演説をしはじめたヨッパライを尻目に、妻は味噌汁をこしらえていた。それは、売れ残りの「聖水」をダシ汁代わりにしたもので、具はネギと豆腐だった。

ちなみに、この「聖水」というアイテムは、いまいち用途がはっきりしない割には、決まって薬草や毒消し草よりも高価なアイテム

なので、いつも売れ残ってしまうのだった。

「おい、そんな話はどうでもいい！」

オヤジが大声でわめいた。独り言である。

「それよりも、いまオレは、まさに人生の転機を迎えようとしているのだ！」

オヤジは、グラスに注がれていたビールを一気に飲み干すと、唐突に立ち上がり、胸を張ってみせる。

「人生の転機！　オレは、道具屋をやめて、コンビニのオーナーになる！」

8 畳の茶の間に、大きな声が響きわたる。

「コンビニ経営とは、つまりフリヤン……じゃなくって、フランチャイズ……あれ、うまく言えねえ……フランチャイズ」

「それを言うなら、フランチャイズでしょ」

すっかり酔いがまわってしまったオヤジにあきれ果てながら、道具屋の妻が、茶の間にあらわれた。酒の肴　「毒消し草とエリンギのバターしょうゆ炒め」を、運んできたところだった。

「ねえ、そのコンビニの話だけど……やっぱり、私は賛成できないわ。道具屋をたたんでコンビニ経営をはじめるとも、もし、死んだお父さんが聞いたら、ぜったいに大反対すると思うもの……」

道具屋の妻のお父さん。つまり、先代社長のことである。

「けっ、先代の社長は、もう死にました……っていうか、じつを言うと、オレが毒を盛って殺したんだけどな！　うまー！」

「えっ、なんですって！」

いきなりの爆弾発言に、妻は、持っていた料理皿を落としそうになった。

「あ、あなた。そ、そそそそれは本当の事なの？」

いまにも泣き出しそうな顔で、妻が問いたです。

「ウソに決まってるだろ。にゃーおかしい」

オヤジが、なんら悪びれることなく即答した。これだからヨッパライは困る。

「……もう、おどかさないですよ」

「と、見せかけて」

「えっ！」

「やっぱり冗談でしたー。うまー」

「もう、やめてよ！」

たちの悪い酔っ払いに翻弄されて、妻は脱力したように畳に座りこんでみせる。

「とにかく、オレは、コンビニのオーナーになるぞ！ 薬草や毒消し草だけじゃなくて、肉まんとか、おでんとか、弁当とか、週刊少年チャンピオンとか、いろいろなもの売るんだもんね！」

そう断言したかと思うと、オヤジは、物心のついていない中学生のごとき奇声を発しながら、せまい茶の間をぐるぐると駆け回りはじめた。

「で、でも、コンビニのフランチャイズ契約って、はじめに、まともったお金が要るんでしょ？」

「契約するには、頭金として800万Gが必要だってさ！」

「アヒヤツ、と、オヤジが笑いながら答えた。

「そんな大金、どうやって工面するつもりなの？ お父さんが残してくれた遺産と定期預金あわせても、その半分にも届かないのに……」

考えてもみれば、道具屋経営で得ることのできる利益など、たかが知れている。10Gの薬草をいくら売ったところで、十分な貯金ができるはずもなかった。

「金のことなら心配するな！」

「そんなこと言ったって……」

「まあ、聞け。わが妻にして、おっぱいの小さい女よ」

さりげない家庭内セクハラをしつつ、オヤジは、ちゃぶ台の下から、金属の塊を取り出した。ちなみに、このオヤジは、小さいおっぱいが好きな、いわゆる「微乳貧乳フェチ」だった。

「おい！ おれの性的嗜好なんて関係ないだろ！ それよりも、妻

よ、聞くのだ。これは『オリハルコン』といって、売れば、グラム当たり数万ゴールドはくだらない代物だ。どうだ、驚いたか！」

そう言っつて、自信たっぷりに、オヤジは、オリハルコンの塊をちやぶ台の上に置いてみせる。このオリハルコンの塊は、音楽用カセットテープほどの小さなものだが、もし売却すれば、数百万ゴールドの価値があつた。もちろん本物である。

「で、でも、あなた。そんな貴重なもの、どこで手に入れてきたのよ。オリハルコンっていつたら、伝説の金属って言われてるくらい、珍しいものなんでしょ？」

目の前に札束の山を積まれたかのごとく、妻は、震えた声をだしながら、オヤジの顔を心配そうに眺める。

「臆病なやつだなー。べつに盗んできたわけじゃないさ。ウヒヤツ！」

まだまだ酔いの醒めていないオヤジが、ふざけながら、妻のほっぺを人差し指でツンツンしてみせる。

「じゃあ、ほうやって、ほんなほのほ……」

しまいには、ホッペをグリグリして遊びはじめた夫にかまわず、妻は問いたました。

「実はな…… 3日前にな、ある冒険者たちが売りに来たのだ。オヒョッ。こいつらが馬鹿な奴らでな、アヒヤツ、この金属がオリハルコンだつてこと知らないで持ってきたらしく、だから思いつきり買い叩いてやったというわけだ、にやーおかしい、にやーおかしい！」

しかも、たつたの20ゴールドでな！ 俺つて、商売うまい！  
そこまて言つと、オヤジは気が狂つてしまったかのように、大きな声で高笑いをし始めた。

「でも、でも、でもね、あなた。もし、その冒険者のお客さんが、この金属がオリハルコンだつたつて知つたら、絶対に取り返しにくると思つんだけど……」

妻が、虫の知らせとも言つべき悪寒を背筋に感じながら言った  
そのとき。

「そのとおりだ」

オヤジと妻、2人だけしかいないはずの茶の間に、聞き覚えのない男の声が響いた。

「よくも騙してくれたな、道具屋のオヤジよ」

誰もいないはずの誰かに、突然、名指しされたオヤジは、高笑いから一転、笑顔を凍りつかせた。

「なに？ 腹話術？」

いま自分の身の周りで起きている不可解な現象に戸惑いながら、オヤジは真顔で、妻にたずねる。

「わたしじゃない……」

妻も、表情をひきつらせてオヤジにこたえる。得体の知れない恐怖のあまり、そう答えるのが精一杯だった。

「ぼったくる相手を間違えたようだな」

姿の見えない声がそう告げたあと、とつぜん、妻は、鼻の先あたりに、かすかな風圧を感じた。

そのわずかな風圧を顔面に受けて、目を開けていられなくなった妻は、一度だけ「まばたき」をした。

まぶたを閉じて、ふたたび、まぶたをひらく。

「あ」

妻が「まばたき」を終えると、オヤジの肩から上の部分が無くなっていた。無いどころか、肉色が鮮やかな見事な切断面からは、まるで噴水のように、幾筋もの赤黒い血潮が、うつくしい弧を描きながら噴き出していた。

「くだらないことを考えなければ、死なずに済んだものを」

いまだ姿の見えぬ声が、先ほどと何ら変わらない調子で、妻の耳まで届く。

「これは返してもらおう」

声がそう告げたあと、妻の目の前に、はじめて姿を現したのは、一本の太い腕だった。頑丈そうな鎧の一部と、小手を装着しているのが見てとれた。

「本当に、バカな奴だ」

その言葉を最後に、ちやぶ台に置いてあつたオリハルコンの塊をつかみ取ると、その太くたくましい五本の指は、妻の前から消えていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1871b/>

---

道具屋うまー

2011年7月23日03時31分発行